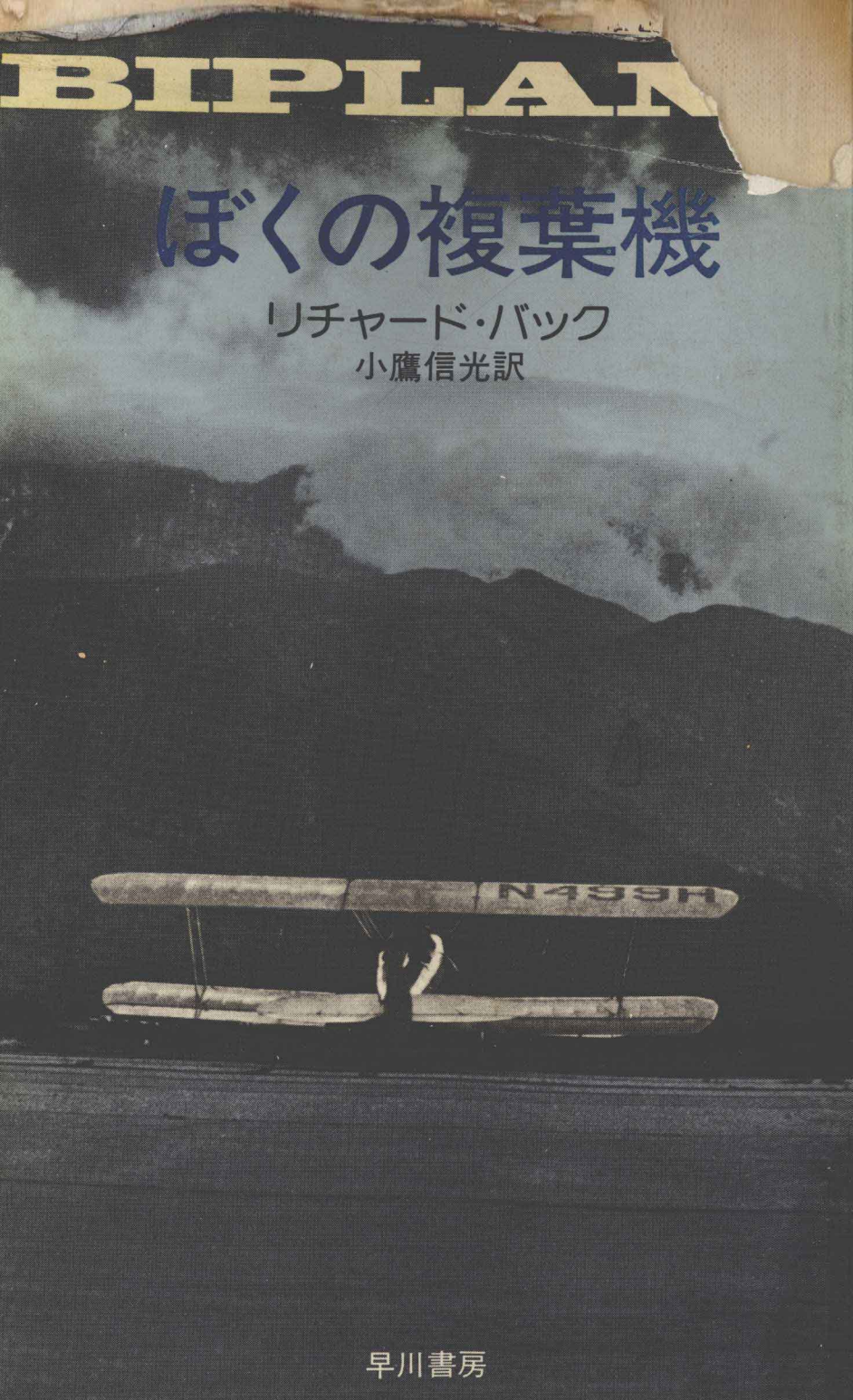
BIPLAN

ぼくの複葉機

リチャード・バック

小鷹信光訳



早川書房

BIPLANE

by Richard Bach
Copyright © 1966 by Creature Enterprises, Inc.
Photos. Copyright © 1966 by Paul E. Hansen and Richard Bach
First published 1974 in Japan by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by arrangement with
Creature Enterprises, Inc., through Charles E. Tuttle
Co., Inc., Tokyo.

TOKYO HAYAKAWA BOOKS

ぼくの複葉機

リチャード・バック　翻訳：小鷹信光
写真：ポール・E・ハンセン／リチャード・バック
発　行　1974. 12. 15
発行者　早川　清
発行所　早川書房　〒101／東京都千代田区神田多町 2-2／振替東京 47799
定　価　1200円
印刷所　中央精版印刷株式会社
製本所　株式会社明光社
©1974 Hayakawa Publishing, Inc. Printed in Japan

乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

の複葉機

リチャード・バック

小鷹信光訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぼくの複葉機

一九二九年の晩春、
アリゾナの小麦畑に着陸した複葉機の
翼の傍で出会った、ぼくの妻へ

バッハへの前奏曲

レイ・ブラッドベリ

飛行についての本を書こう、と志していたら、ディック（リチャード）・バックは一冊の本も書き得なかっただろう。

これは、ささやかな賛辞である。

〝飛行〟という言葉を、離着陸の技術とか、エンジンの修理法とか、一九一七年製の張線の張り換えといった、たんなる技術的な計画や実地作業ととりちがえたりすれば、この本の第一ページめから、私たちが若いミスター・バックから得られるはずのものの意味をもまた、とりちがえてしまうことになるにちがいない。

だがその逆に、私たちがもてる知識に新鮮な空気をすすんで送りこみ、イカロスとともに蠟づけの翼で太陽に向かって飛び、モンゴルフィエとともに熱気球で降り、ライト兄弟とともにふたたび空に舞いあがり、全身を空気にさらし果てしなく高揚をつづければ、そのとき私たちはディ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ック・バックの野育ちのトム・スウィフトの手に身を委ねることになる。彼は〝飛行〟するのではない。彼の祖父のそのまた先代にあたる偉大なヨハン・セバスチャン・バッハが、音楽を〝書いた〟のではなかったように。彼は音楽を内から〝発散〟させたのだ。

私は、叙事的な作家ではなく、アイディア・ライターである。だがなんとかしてあなたがたに、ディック・バックのことを叙べてみたい。彼は長身で、骨ばっていて、ちょうどスウィフトのガリヴァーが小人国の家に入るときのように、からだを斜めにかしげてあなたの戸口に入りこんでくる。野良仕事を終えて畑からあがってきたばかりのようにもみえる。それも道理、彼はいまあなたの土地の北隅に複葉機を緊急着陸させ、あたたかな光をめざして畑を横切り、大急ぎで穫り入れの手助けをしようと駆けつけてきたのかもしれないのだ。

彼は、大柄でずんぐりした、愚鈍にさえ見えるあの偉大なアメリカン・ボーイの一人なのだ。蒸気機関車が赤銅色のインディアンを火龍のごとく畏れさせ、サン・ファン・テディがあの地峡を素手で掘り抜いた日以来、アメリカ中の地下室や屋根裏部屋でともされてきた産業革命の光明に照らされて豆の芽のようにふきでた、私たちがこの目で見つづけてきた何でも屋の鋳掛け屋や漕ぎ船の修理工と同じ人種なのだ。

ディック・バックは、新鮮なアップル・パイやラファイエット戦闘機隊を目にしたとき、人々の口にのぼるすべての常套句である。（最近彼は、それにはおよそ似つかわしくない英国風の端正なブロンドの口ひげをたくわえはじめた）

古い戦記をのぞいてみれば、薄れかけた千枚もの写真の中から、誇らしげな無垢な目であなたを見返している彼の顔をたちどころに見いだすだろう。もしその写真が二千年前のものであっても、ブリタニアに攻め入って引きあげていったシーザーの、人当りのよさそうな微笑と、からだをかしげた愚鈍そうな身振りの背後に同じものを見つけだすにちがいない。

彼は、ダイダロスでもなかったし、その子イカロスでもなかった。このギリシャ神話の父子は、彼らなりの方法で特殊な父子だった。しかし、リチャード・バックは、ダイダロスが志し、イカロスが失敗してエーゲ海に落ちた光景を目撃した一人であり、どんなことがあってもそれを自分でやってみようと決意した男の一人だった。三十世紀にわたる時を旅する彼の生霊は、運河を飛び越え、蝶の羽根のような竹の翼で中国の高官たちをおどろかせ、傘とともに牛小屋の屋根から落下した。その生霊たちの中には、現在のディック・バックよりチビのものもいるが、その一人一人が、人類破滅の日にも自分だけは永遠に生きつづけると信じている、あの真昼の太陽に照らされたリンゴのような共通の微笑を浮かべている。

私たちは彼の試みに絶望し、彼のために嘆くが、最後には、すべての物事にたいする最善の解答がたった一つの高笑いであることを知っていた『白鯨』の偉大なスタッブ水夫のように、歴史にのこる数多くのリチャード・バックたちとともに声をあげて笑う。

これは、飛行ではなく空高く飛翔すること、機械の芸当ではなく想像力の離れわざについての、彼自身の最愛の本である。

何代も何代も前の彼の祖先は、音楽をつくった。ここにいる子孫の一人は、単純な言葉をとりだそうとしているだけだ。

多分この少年は、先代ほど高くは飛ばないかもしれない。多分。だが、見あげてごらん……ほら、あそこに彼が。

一九六五年五月十七日

—1—

新しい生き方の初演の夜——そんな感じがする。だが、いまは夜ではなく朝だし、荘重にひかれるはずのビロードのカーテンもない。それにかわる格納庫の波形ブリキのドアは、ゴロゴロとひきずるような音を立てながら、荘重というよりむしろ頑固な素振りでコンクリートの溝をひかれてゆく。格納庫のなかにはしめった暗闇と、幅広い下翼の黒い二つの影があり、丈の高い格納庫のドアがひらくと、暗いしめりけは跡かたもなく消え失せ、そこに新しい生き方が待っている——骨董品のような複葉機だ。

ぼくはここに商売の取引きにきている。ごく単純な交換取引き。毎日どこかでおこなわれている旧式飛行機の交換取引き。勝手がわからずに不安な気分におそわれる理由は、これっぱかしもない。

にもかかわらず、心もとない疑惑が黒雲のように格納庫のなかから押しよせてくる。ここにあるのは一機の旧式飛行機。いくら見たって変りはない。これが作られたのは一九二九年、いまは現在。もしこれをカリフォルニアまで持ち帰りたければ、アメリカ大陸を横断し、二千七百マイルの空を飛ばしてゆ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c